

## 「自分の進みたい途へ」



総長・学長

ながい  
永井  
かずゆき  
和之

京法学院を経て中央大学へ」  
金原左門・竹田行之。

ここでの意味をどう解するか  
人によって異なると思います。  
しかし、昔から「生兵法怪我の  
もと」という言葉もあります。

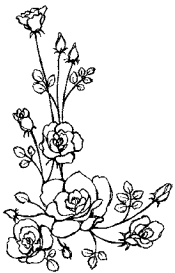
自分のことは自分で判断をして  
間違えても文句は言えませんが、  
人のことを判断して間違えたで  
はすみません。とりわけ専門家  
として、専門的な知識・能力・  
経験に基づいた判断をする場合  
は、なおさらであります。また、  
専門家でなくとも社会人として  
生きていく上では、個人もその  
行動について社会的責任を負わ  
ざるをえないと考えます。

とすると、大学で学ぶという  
ことは、その個人にとって役に  
立つか否かということだけでは  
すまされないものがあるのでは  
ないでしょうか。新入生の目指

福沢諭吉が英吉利法律学校の  
開校式に祝辞として言ったこと  
に次のような部分があります  
（英吉利法律学校は明治18年に  
創立された中央大学の前身であ  
ります）。そこでは、福沢諭吉  
は人間必須の学問として法学を  
医学と並べております。それは  
人間生活するに何でも法律問題  
がつきまとうから、弁護士など  
の法曹にならないでも学んだこ  
とは無駄にならない。それに対  
して、医学も医者にならないで

も自分の身体のことを常に医者  
に任せておくのでは不安心であ  
るから、医者に頼らないでも養  
生できるように医学を知らなけ  
ればならないということが無駄  
にならない。学問のうち半分学  
んだだけでは役に立たないもの  
もあるが、医学や法学は一日だ  
け学んでも役に立つと言ってお  
ります（「福沢手帖111・平  
成13年12月20日」9頁「志とし  
ての「在野法曹の法律家」明治  
義塾から英吉利法律学校へ 東

すべき将来の自己の姿は、今は  
どうあれ最終的には人間性や感  
性までもが問われるのだと考え  
ます。そのような人間性や感性  
の涵養といったことは教室内の  
教員による授業だけではなく、  
本学のキャンパスという場にお  
いてキャンパスを構成している  
教職員・学生など構成員の醸し  
出す雰囲気や、そこにおけるお  
互いの切磋琢磨といった環境に  
よつても涵養されることと考え  
ています。その意味でも、本学  
は、君たちが育つていく、まさ  
に母なる大学として、誇るべき  
伝統と今を持っています。自信  
を持って、進んでください。君  
たちが選ぶ途へ。



# 自分用のカリキュラムを作ろう！



法学部長

かない たかじ  
**金井 貴嗣**

大学に入ってガイダンスやオリエンテーションが終わり、大学生活に慣れてくると、高校のときと違って「自由な（拘束されない）時間」がたくさんあることに気づく。大学の授業は、1時限が90分で、1日に6時限（ないし7時限）、それが週6日間にわたって配置されている。合計36コマのうち、実際に履修するのは14コマないし15コマくらいである。残りの20コマの時間と授業時間以外の時間が「自由な時間」となる。

この「自由な時間」をどのように過ごすかによって、大学生活が充実したものになるかどうかが決まるといっても言い過ぎではない。この時間の使い方は人によって違うであろう。外国語の会話能力を高めて留学したい、ボランティア活動に参加したい等々。サークル活動も「お遊び」でなく仲間と切磋琢磨するようなものならよいであろう。大切なことは無為に過ごすことなく、自分を磨くために自分で計画を立てること、そういう意味での「自分用のカリキュラム」を作って欲しい。

1年生のときくらいは、小説などの文学書をたくさん読んで、自分が、これからどう生きていきたいかを、じっくり考えて欲しい。たとえば、司馬遼太郎、吉村昭、城山三郎等、歴史上の人物をとり上げた作品を読むことを「あなたのカリキュラム」の中に加えてみてはどうだろうか。

# 学びの再構築



経済学部長

まつまる かずお  
**松丸 和夫**

経済学部へのご入学おめでとうございませう。経済学部は、今年度、カリキュラムを改正し、新たな一歩を踏み出します。その「新生 中央大学経済学部」の1期生として私たちの仲間に加わっていただいた新入生のみなさんを心から歓迎いたします。今日、新たに大学生として生活を開始されるみなさんに考えていただきたいことが二つあります。一つは、自分は大学で何を身につけたいのか。二つめは、大学を卒業したら自分はどうな人生を送りたいのかということです。

大学に入学するということは、みなさんご自身はもとより、ご父母やご親族にとっても大きな喜びでしょう。しかし、これから過ごす4年間の大学生活で、何も身につけるものがなかったとしたら大学で学ぶことに何の意味がありません。ここにちまみで、みなさんは勉強するということについてどんな考え方をもちてきましたか。やれといわれるから勉強する、勉強とは忍耐力の涵養だ、将来の可能性を開く上で必要だ、勉強をおもしろいと思ったことはない等々、百人百様でしょう。それはそれで結構なことだと思いません。しかし、大学で勉強すること、この本質的な意味は、「みずから課題を発見し、その解を求めろ」とことにあるのではないのでしょうか。これまでの勉強に対する姿勢、勉強の方法を一度根本から見直し、大学での学修について深く考えてみましょう。問題に対する正解らしいものをどこからか探してきて、コピー&ペースト（引き写し）することはいただけません。

人の一生は、学びの連続です。「」のための勉強から「よりよく生きる」という発想で、大学生にふさわしい学びの再構築にチャレンジしてください。

## 市民社会の担い手として



商学部長

さかいしゅうさぶろう  
酒井正三郎

新入生の皆さん、入学おめでとう。これから始まる大学生活を前に、皆さんの胸は期待感と心地よい緊張感に包まれているのではないのでしょうか。社会に出る前の最後の学府である大学の四年間は、皆さんのこれからの人生にとって大変大きな意味を持つています。

皆さんが入学した商学部の教育課程は、「ビジネスを学ぶ」を中心的テーマとし、ビジネスを通じて社会変革をリードできる人材の育成という基本的な考え方に基づいて編成されています。

ここで注意してほしいことは、「ビジネスを学ぶ」とは決してビジネスそのものを直接教授するということではなく、ビジネスの成り立ちや意味、あり方を多方面から科学的に探求するということであり、その根底にはつねにアカデミズムの精

神が横たわっているということですが。したがって私たちは、かかる意味でのビジネス教育と市民社会のアクティブな担い手の育成とは基本的に同義のものと考えており、こうした理念の追究に相応しい、広い知見の修得に向けたカリキュラム上の工夫にも大変力を入れています。

学生時代は、大学入学のための受験「競争」と大学卒業後にひかえる社会での「競争」のはざ間にあって、「競争」とは無縁の（少なくともそうであることが可能な）人生ではほとんど唯一の貴重な時間です。

皆さんの一人ひとりが、商学部の四年間で読書や思索に思う存分時間を費やし、友と語り、責任感や倫理感、構想力や判断力を磨き、ビジネスパーソンとしての人間形成に必要な、深い、本物の教養を身に付けられるよう期待しています。

## 「勉強はつらいが研究は楽しい」



理工学部長

たぐち あずま  
田口 東

大学生になると、講義の取り方だけをみても、自分で決めなければならぬことが沢山あるのに気付きます。学生生活の自由度が大きく、自分自身の責任で物事を決めるチャンスが多くなるのです。一生の間このような時期は滅多にありませんから、悔いを残すことのないよう是非有意義に過ごしてください。

私たちは、在学期間中に、皆さんが何らかの形で科学技術の第一線に参加できる力を身につけることを期待しています。それははるか彼方に輝いているように思うかもしれませんが、実はすぐ近くにあつて、熱く手にすることが出来ます。基礎から応用へと続く理工学部のカリキュラムを学ぶことにより、内容を理解できるようになり、私たち教員や大学院生の指導を受けながら、研究に取り組むこととなります。卒業研究

では、試行錯誤をしながらも、かなりの部分を自分の力で研究を進めるチャンスが得られるのです。単に学ぶだけでなく、研究を通じて「知」を創造する訓練を積み、成果を得る喜びを味わうことにより、将来未知の課題に出会ったとき、それを解決する能力を身につけることができます。

上の事に加えて、私が皆さんに望むのは、自然にしても社会にしても、その中の仕組みに対して、素直に興味を持てること、自分なりの答えを見出すまでの持続力を身につけること、そして答えに自信を持つことです。そのために、ゆつくり本を読む時間を作ること、良い友人を作ることの二つを勧めます。そのようにして成長しつつある先輩諸君の日々の活躍を理工学部のWebサイトで見てください。そして、皆さんも是非その仲間入りをしてください。

## 友をえらばば書を読みて：



文学部長  
宇野 茂彦

新入生のみなさんご入学おめでとうございます。

人は今を生きることが大切です。学生時代にしかできないことを一所懸命にして欲しいと願います。

与謝野鉄幹は明治の末の頃、「友をえらばば書を読みて六分の俠氣、四分の熱」と詠いました。読書を通じて、感想を述べたり議論したり、共感したり反発したり、そういう交友はやはり大学生らしい交際だと思います。俠氣というのは、自分のことばかり考えず、人のために行動する心意気だし、熱というのは、情熱をもって事にあたることでしょうか、そのようであればよき友は自然に得られるでしょう。

明末の書に「菜根譚」という、なかなか味な本があります。このなかに「友に交るには、須く三分の俠氣を帯ぶべし、人と作るには一点の素

心を存するを要す」とあります。一点の素心というのは、意味深長ですが、少なくとも素直で平明な心がなくては人にはなれないといった意味でしょうか。

鉄幹も、もしかするとこの文章を意図的に変形して、三分を六分に倍増し、更に熱を加えて、情熱的行動を強調したのかも知れません。

「菜根譚」は明末の文人洪自誠の著ですが、明末は不安な時代で、その頃の知識人の風潮を反映して、些か退屈的な雰囲気が見られます。一方、明治の世相も必ずしも明るくはなかつたけれども、当時の知識人たちには、時代を鼓舞する気分がありました。鉄幹のこの歌にもそれを感じます。

皆さん読書を通じてよい交友を持つててください。

## 知識の島と不可思議の海岸線



総合政策学部長  
大橋 正和

「知識の島が大きくなるほど、不可思議の海岸線が長くなる。」この言葉は、米国の牧師であるラルフ・W・ソックマンの言葉である。大学で勉強する目的の一つに「学問を学ぶ」ことにより知識の神髄に近づく物事の本質が明らかになるのではと期待している諸君が多いことと思う。しかし、冒頭の言葉は学べば学ばほど新しい疑問や不思議に思うことがどんどん増えていくということも言っている。

標準化の世界では、高校までの教育を英語で「エデュケーション」といい、大学以降の生涯教育を「ラーニング」と呼び区別することになっている。エデュケーションとラーニングの違いは何かという自律的に学習できるかどうかの違いである。高校までは、教科書がありそれに従って勉強をし、ほとんどの問題は、解答が存在する。大学の教育がラーニングと呼ばれるのは、自律的に学習する方法を身につけるとともに授業

時間の中で学習だけではなく、問題の発見、問題の解決方法などにより、新たに知識を創造する方法を学ぶことにある。ラーニングで大事な点は、個々の学問の体系を学ばばかりでなく学問に関する考え方やものの見方といった個別の事実からその原因や考え方を追求し普遍化された共通の原理や理論を見つけて出すことである。すなわち、知識が増えれば増えるほど、新たな疑問や新しく学習したいことも増えるのである。大学で学んだことの中で細かい事実は忘れてしまふことはあつてもこのような基本的考え方やラーニングの方法は忘れないものである。大学で学ぶということは、授業ばかりでなく課外活動や授業期間外にも学び（ラーニング）の姿勢を忘れないでほしい。どうか諸君の大学生活がエデュケーションではなくラーニングであることを願うとともに知識を獲得するだけでなく不可思議の海岸線が長くなりさらなるラーニングへむけて努力することを願っている。